

日本の都市域と非都市域におけるジェネレイティビティの差異

1180472 濱田幹規

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

少子化が深刻な日本において、ジェネレイティビティ、つまり次の世代のためのことを思って起こす行動は、この国の未来を左右する重大な関心事である。例えばネパールなど開発途上国の都市域において、次世代への配慮を顧みない自己中心的な行動がもたらす社会的な問題として、ジェネレイティビティ・クライシスと呼ばれる現象が報告されている。本研究では、日本におけるジェネレイティビティの現象を確かめるため、都市域と非都市域の合計400人の対象者にアンケート調査を実施し、社会人口学的情報に加えて、次世代行動チェックリスト (GBC) のデータを収集し、統計的に分析した。分析の結果、日本の都市域と非都市域の間で、ジェネレイティビティの数値に違いは見られなかった。このことから、日本においてはネパール等の開発途上国と異なり、都市域と非都市域で単純に分類されないことが分かった。

2. 背景

次世代志向を表すジェネレイティビティの考え方はエリクソン (Erikson) によって定義され、それ以降も多くの研究者によって再定義されてきた。本研究におけるジェネレイティビティはエリクソンの第一義的定義である「次の世代を確立させ、導くことへの関心」と定義する。つまり、人生のあらゆる選択の中で、次世代のための選択肢を選ぶかどうかということである。(田淵, 2010)

日本の人口は1875年から2005年まで増加し続け、3,500万人から、1億2,800万人へと推移した。しかし、国立社会保障・人口問題研究所の最新の研究によると、少なくとも2065年までは人口が減少することが予想されている。例として合計特殊出生率が1.44の中位仮定で見ると、総人口は2015年の1万2,709万人に対し、2065年は8,808万人に減少している。これまで大幅に人口増加してきた日本が、これから人口減少が進み、少子化が深刻化していくことが予想される。この人口減少の現象は日本だけでなく、多くの先進国で起こることが予測されている。その上、ネパ

ールなどの開発途上国の都市域において、次世代への配慮を顧みない自己中心的な行動が社会にもたらす問題として、ジェネレイティビティ・クライシスも報告されている。

(Timilsina et al., 2018 ; Aubin et al., 2004)

持続可能な社会をつくるうえで、私達が次の世代の利益を考えて行動し、自然環境や資源、そして文化をいかにして子孫に受け継がせていくのかということはとても重要である。

この課題に向き合うために、本論文では、日本のジェネレイティビティの状況について、ネパールと同様に「日本の都市域と非都市域を比較して、都市域の方がジェネレイティビティが低い」と仮説をたて、都市域におけるジェネレイティビティの低下が見られるかどうかを明らかにする。

3. 目的

本研究では、次世代行動チェックリスト (GBC) を用いて日本の「都市域」と「非都市域」のジェネレイティビティの数値を分析し、非都市域に比べ、都市域におけるジェネレイティビティの低下が見られるかについて考察する。

4. 研究方法

日本の都市域200人、非都市域200人の合計400人を対象にアンケート調査を実施する。アンケート調査では、年齢、性別、居住地域などの社会人口学的情報に加えて、Generative behavior checklist (GBC) に沿った質問を実施する。

アンケート調査で得られた情報を統計的に処理し、都市域と非都市域におけるジェネレイティビティの特徴について分析する。基本統計量の算出し、違いが見られるか分析する。

本研究では人口密度1平方kmに500人以上を都市域、それ以下を非都市域と区別する。

4-1. GBC について

GBC (Generative behavior checklist) とはマックアダムス

(McAdams) らによって開発された次世代への生成行動を測定するためのチェックリストである。設問の行動を回答者が過去1年以内に行ったかどうか、及びその頻度をチェックする。例えば、「誰かに技術を教えた」という設問に対して、回答者は以下の選択肢から一つ選ぶ。

①過去1年以内にその行動をしていなければ” 0”

②過去1年以内にその行動を1回していれば” 1”

③過去1年以内にその行動を2回以上していれば” 2”

設問は全50問あるが、そのうち10問(3, 4, 8, 14, 18, 22, 33, 39, 46, 47 問目) はダミーであり、残りの40問の合計がジェネレイティビティの値となる。

実際に行ったアンケート調査の設問は以下の通りである。

1. 誰かに技術を教えた。
2. 若者のために模範を務めた。
3. 賞を得た、あるいはコンテストで優勝した。
4. 映画を見に行った、もしくは遊んだ。
5. チャリティーに寄付した。
6. ボランティアに行った。
7. 誰かの個人的な悩みを聞いてあげた。
8. 車もしくは家電を購入した。(例: ラジオ、テレビなど)
9. 宗教的な教えを説いた。
10. 誰かに善悪、良い悪いについて教えた。
11. 誰かに自分の子供時代について語った。
12. 子供に物語を読んであげた。
13. 誰かの子供のベビーシッターをした。
14. 運動競技に参加した。
15. 非営利団体に服あるいは何か自分の持ち物を与えた。
16. リーダ的な役割に選ばれた、あるいは昇進した。
17. 多くの人に影響のある決定を行った。
18. レストランで食事をした。
19. 何かアートあるいは工芸に類するものを作った。(例: 詩、手芸、木工、絵画等)
20. 家族以外の組織・グループの計画に参画した。
21. 親族ではない人にお見舞いに行った。
22. 小説を読んだ。
23. 誰かのために何かを作り、あげた。
24. 誰かが環境に適応するのを助けるために、自分の過去の経験を引き合いに出した。
25. 道路やあなたの土地ではない場所で、ごみを拾ったり、きれいにしたりした。
26. 知らない人に道案内をしてあげた。
27. 地域の集まりや町内会などに出席した。
28. 詩や物語を書いた。
29. ペットを引き取った。
30. 誰かがユニークだ、あるいは大切だと考えていることをした。
31. 寺院での話し合いや活動に出席した。
32. 友達や知人から手助けを求められた。(誰かの移動を手伝ったり、車を直したりなど)
33. 友人や家族と口論・議論があった。
34. 政治的あるいは社会的な理由のため、時間やお金を寄付した。
35. 木や花などを植えたり、庭の手入れを行ったりした。
36. 新聞、雑誌等に社会問題に対する投書を行った。
37. 家族でない人にご飯を作ってあげた。
38. 献血した。
39. 処方箋の薬を使った。
40. 衣服や何か他の物を縫ったり、直したりした。
41. 家、家の一部、家具などを再建、修復した。
42. 子供のおもちゃを組み立てた、あるいは直してあげた。
43. 政治的な候補あるいはほかの選挙される役職に投票した。
44. 何かを開発した。
45. 応急処置やその他の医療の手当てを施した。
46. パーティーに出席した。
47. 昼寝をした。
48. 慈善事業に参加、出席した。
49. 新しい技術を学んだ。(例: パソコン、溶接等)
50. 親になった。(子供を持った、子供を養子にとった、あるいは里親・育ての親となった)

(McAdams & Aubin., 1992 ; McAdams et al., 1998)

4ー2. 基本統計量の算出、マンホイットニー検定

WPS Spreadsheets を使用し、アンケート調査で得られた GBC のデータを元に基本統計量の算出を行った。

マンホイットニー検定（ウィルコクソンの順位和検定）には STATA を使用した。

5. 結果

5ー1. 基本統計量

基本統計量は以下の通りである。

	非都市域 200人	都市域 200人
平均	13.99	13.145
分散	155.0149749	147.3909296
標準偏差	12.45050099	12.14046662
歪度	1.302844944	1.438610751
尖度	1.845333507	2.801786532
最頻値	0	0
最小値	0	0
第1四分位	5	4
中央値	10	10
第3四分位	21	19
最大値	64	70
範囲	64	70
合計	2798	2629

図1 基本統計量

基本統計量は図1 の通りである。注目すべきは、最頻値が0、最小値が0、中央値10 と、両者全く同じ点である。

平均値については非都市域が 13.99、都市域が 13.14、合計は非都市域が2798、都市域が2629 である。分散については非都市域が155.01、都市域が147.39、標準偏差は非都市域が12.45、都市域が12.14 である。歪度については非都市域が1.302、都市域が1.43、尖度は非都市

域が1.84、都市域が2.80 である。第1四分位は非都市域が5、都市域が4、第3四分位は非都市域が21、都市域が19 である。最大値、範囲は非都市域が64、都市域が70 である。図3の箱ひげ図からも、両者のジェネレイティビティに大きな違いはないことが読み取れる。

しかし、外れ値に注目すると非都市域は比較的近い値が多いが、都市部では44ポイントの次の被験者が、61ポイント、70ポイントと大きく差が開いていることがわかる。

都市域と非都市域のジェネレイティビティについて、マンホイットニー検定（ウィルコクソンの順位和検定）を行い、無帰仮説（都市域の母平均＝非都市域の母平均）と対立仮説（都市域の母平均≠非都市域の母平均）を調べた（Two-sample Wilcoxon rank-sum ・Mann-Whitneytest）。その結果、非都市域と都市域では対立仮説は棄却された。

Ho: GBC(非都市域) = GBC(都市域)

U= 19109

z = 0.771

Prob > |z| = 0.4405

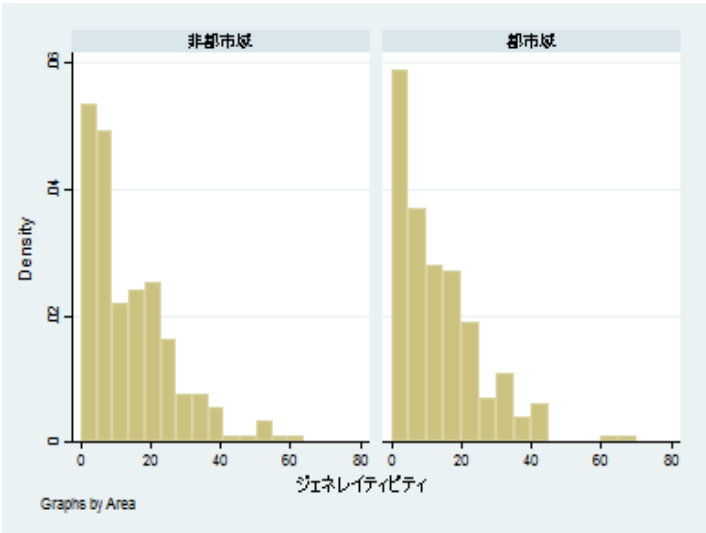


図2 ジェネレイティビティの分布

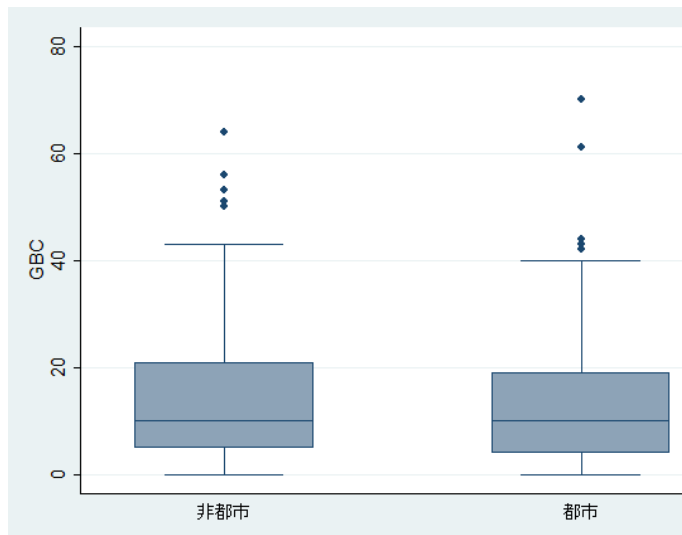


図3 箱ひげ図

6. 考察

本研究では「都市域と非都市域を比較して、ジェネレイティビティは都市域の方が低い」という仮説を立て、アンケート調査で収集したデータを統計的に分析した。基本統計量の算出結果から、仮説とは異なり両者のジェネレイティビティに大きな違いがないことがわかった。しかし、この結果はネパールなどの発展途上国と違う日本社会のジェネレイティビティの特徴を知るうえで意味を持つと考える。ネパールでは向社会性と農村特有の影響がジェネレイティビティを高めると報告されている。農村部では農業ベースで生活をし、技術と知識の継承を次の世代に向けて行っている。また、地元の人的ネットワークを大切にする傾向もある。この2つの農村特有の影響が農村のジェネレイティビティを高めていると考えられる。一方、都市域は人口密度が高く、毎日多くの人に出会う。しかし、その多くはすれ違うだけの他人であり、互いの結びつきやつながりは弱い。(Timilsina et al., 2018)

「田舎の人は優しい」。この言葉は高知県で生まれ育った私にとって、よく耳にする言葉である。また、人のぬくもりが好き、子育てのために非都市域に移住する人も多くいる。しかし、今回の調査からは日本の非都市域も都市域もジェネレイティビティについては大きな違いはなかった。

この点について、日本ではネパール等の発展途上国とは異なり、非都市域においても農業以外の仕事に就き、都市的な消費生活をしてい

る。高知の地域では「田舎」の良さが残っているが、ジェネレイティビティに影響を与える要因については失われつつある可能性もある。また、非都市域及び都市域の両方でジェネレイティビティが下がっている可能性もある。実際、ネパールの都市域のジェネレイティビティが37.91 (Timilsina 2018)であることを考えると、日本の場合は非都市域でさえ既にジェネレイティビティ・クライシスの状況にあるとも言える。日本において非都市域と都市域のジェネレイティビティを比較した研究はまだ少なく、ジェネレイティビティの変動を観察するためには継続的な研究が必要である。

日本では2020年の東京オリンピックに向けて多くの人が移動し、人口がさらに都市域に集中することが予測される。都市化が進むことでジェネレイティビティを危険にさらすことが指摘される中、未来の日本を守るためには、一人ひとりが次世代に何を残せるか、それらをどうやって受け継がせていくかを考え、実行することに関係する、ジェネレイティビティを意識する工夫が大切だと考える。

7. 課題

本研究では日本における都市域と非都市域のジェネレイティビティを調査したが、日本ではネパールのような発展途上国で農村部と分類される地域は少なく、都市域と非都市域の分類の仕方に限界があった。今後は、都市域と非都市域の分類の仕方はもちろん、ジェネレイティビティの高低に影響を与えると考えられる要因について新たな仮説を立て、より日本の現状に即した質問項目を考える必要がある。

8. 参考文献

日本の将来推計人口（平成29年推計）報告書

http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29_ReportALL.pdf

田淵 恵, (2010), 世代性(Generativity)の概念と尺度の変遷, 老病死の行動科学, 13, 20-22.

Timilsina, R., K. Kotani and Y. Kamijo (2018) Generativity and social value orientation between rural and urban societies in a developing country.

Futures (Forthcoming)

St. Aubin, E., D. McAdams and T. Kim (2004) The generative society: Caring for future generations. *Academic Press*.

McAdams, D.P., & de St. Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1003-1015

McAdams, D.P., Hart, H.M., & Maruna, S. (1998). The anatomy of generativity. In D.P. McAdams and E. de St. Aubin (Eds.), *Generativity and adult development: How and why we care for the next generation* (pp. 7-43). Washington, D.C. : APA Press.